

第5章 総 括

第1節 石垣の特徴

沼田城本丸東面石垣及び西櫓台北面石垣に見られる特徴として、築石石材として横長大型の石材を用いる点が挙げられる。特に石垣の下部に用いる。これらの石材は控え長が短く、最も表面積が大きい面を石面として横積みを行っており、石垣を安定して積み上げることができる小口積みよりも築石の大きさを誇張する積み方を行なっている。また後述するとおり、沼田城で用いられる安山岩は薄板状に割れやすい性質を持つ。小型の築石石材に横長のものが多いのは勿論だが、威信を示すために大型の石材を使用する場合にも同様な理由で横長・大型の石材が用いられやすい傾向にあると考えられる。

築石石垣面は、西櫓台北面を除き、石面端部にハツリによる整形を行っている。矢を用いた分割後の裁断面にもハツリ整形を行っており、石垣面を整える意識が強く働いている。

本丸東面石垣では、緩く弧を描くような配石を行っている部分がある。同様な配石は西櫓台北面石垣にも見られる。弧状の配石の下部に、特に大型横長の石材が集中的に配されている点もこの配石が意図的に行われていることを示している。

第2節 石垣の時期

第2章で触れたとおり沼田城の石垣が構築された時期は、天正期整備、慶長期整備、万治・寛文期整備の3回が主に考えられる。しかし、いずれの普請時もどの石垣を築いた等の記述はない。また現存する石垣について断割調査を行っていないため沼田城における石垣及びその構築技術の新旧関係は不明である。沼田城の石垣の時期については、修復歴のない明確な検出石垣がない現在では判断が難しい。

西櫓台北面石垣は4面がそれぞれ異なる表情を持ち、かつ第4章で述べたとおり昭和58年以前に修復履歴があるため、それぞれの石垣の時期や前後関係について述べることは現在のところ難しい。

本丸東面石垣は、築石石材への加工を十分に行うことにより石垣の安定を図りながら、本丸正面石垣としての美観を整えたことが伺える。この点において西櫓台北面石垣とは一線を画すものであるが、構築場所の違いからくる相違と考えることもでき、必ずしも時期差を示すものとは考えられない。

一方石垣の勾配は、西櫓台北面で最も残存状況の良い西面石垣で80°であるが、本丸東面石垣では65°から70°に分布の中心がある。西櫓台北面の方が垂直に近く、古相を示すと考えられる。

第3節 石材の採取場所

本丸東面石垣及び西櫓台北面石垣に用いられる石材は安山岩が用いられる。黒色に近い暗灰色で、2～3ミリの白色鉱物（斜長石）を多く含み、また大きく斑晶の成長した黒色の鉱物（輝石）を含む。節理面で割れて薄板状を呈するものが多く見られる。この安山岩は約110万年前に形成された武尊山天神グループと呼ばれる溶岩の一つで、武尊山から南西方向に流れ出て南北の帯状に分布し、沼田市奈良町、下久屋町に露頭が観察できる。関越自動車道薄根川橋及び片品川橋は、地盤が強固なこの武尊

山天神グループ溶岩の上に築かれている。

国立公文書館蔵「沼田記事」は、天正11年(1581)の真田氏による沼田城築城の様子を「石寄奉行小山田壱岐守、不動坂・奈良坂ヨリ引寄ル、石垣築奉行池田長門守タリ」と伝えており、沼田城築城に必要な石材を「不動坂・奈良坂」から採石したことがわかる。また、慶長元年(1596)には「石寄奉行小山田壱岐守・羽田雅楽、久屋坂・奈良坂ヨリ引ナリ、惣石垣増築」とあり、この時の整備では石材を「久屋坂・奈良坂」から採石したことがわかる。不動坂は沼田市下久屋町に、奈良坂は同奈良町・秋塚町に名が残されている。

不動坂は、沼田台地を沼田市下久屋から同上原町へと比高差98mを登る狭い坂道の一部として現在も機能している。途中県道により分断されるが、県道から上は観音坂と名を変えて登っていく。観音坂には現在でも武尊山天神グループの安山岩の露頭があり、沼田城の石材はこの観音坂（不動坂）および奈良坂付近から採取したものと考えられる。また、南北に分布する天神グループの末端に位置し急激に冷却されたため板状に割れやすい板状節理をもち、本丸東面石垣や西櫓台石垣に板状の石材が多い理由の一つは、石材の生成と採取地点によるものと言える。

第4節 西櫓台整地土中の石積と「由良」墨書について

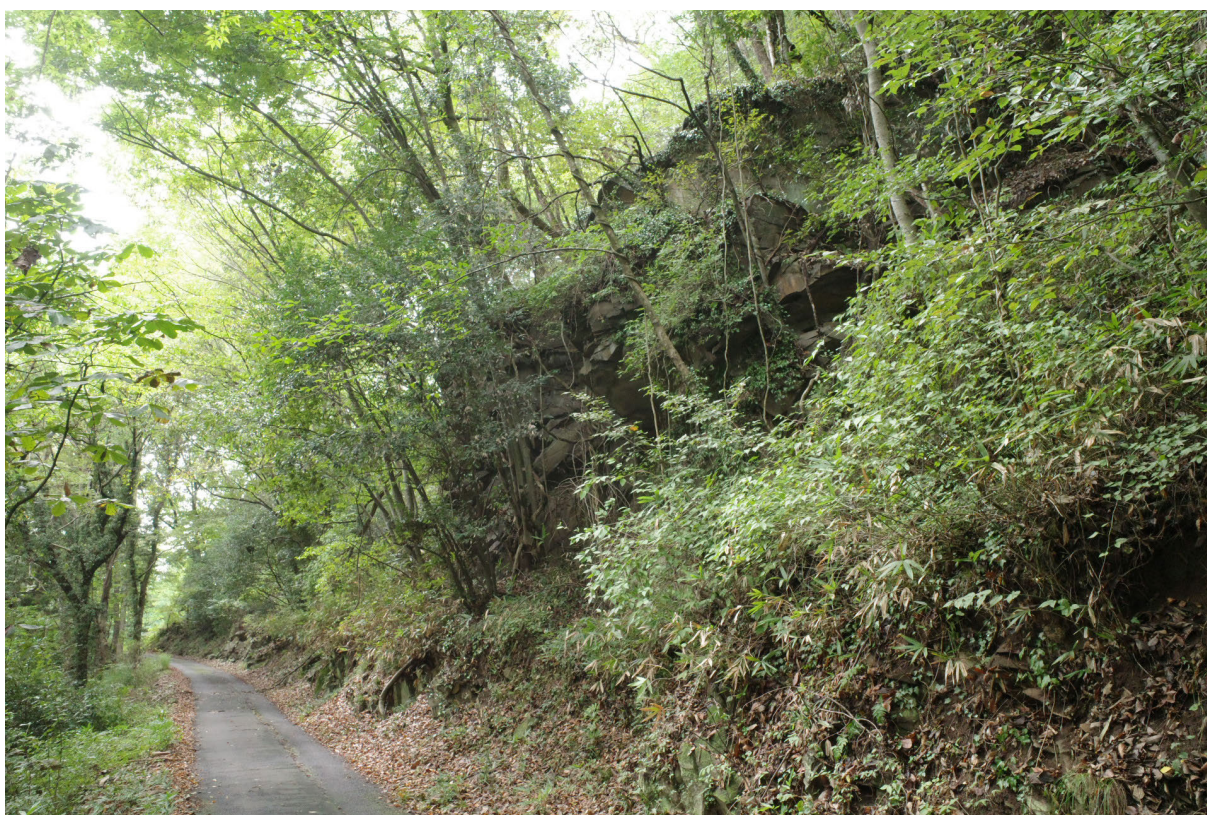
西櫓台整地土中から扁平な安山岩割石の石積を確認したことを第4章で述べた。平成9年(1997)度の発掘調査の際に、この石積について全体を把握するための調査を実施している。その結果、石積は南北12.6m、東西10.8mの方形に並べ、その内側に井字状に並べ、高さは1.0m以上積み上げていることがわかった（沼教委2001）。

昭和58年(1983)の修復工事中に、石積石材中に「石三つ 由良 □□□□」と墨書されたものが認められた。由良氏によって石が三つ供給されたことを示すと考えられるが、その石材の一部が整地土中石積に使用されたものであろう。

由良氏は金山城（太田市）を拠点に活躍した上野を代表する氏族で、永禄から天正期には北条氏、上杉氏ら巨大勢力の間で浮沈を繰り返していた（註2）。第2章で述べたとおり、沼田城において普請が行われる機会は真田氏以外にも、最初の築城者である沼田氏、永禄3年(1560)以降上野へ進出してくる上杉氏、関東惣無事令と沼田領裁定により沼田城を得た北条氏、真田氏改易後に沼田藩主を勤めた本多氏、黒田氏、土岐氏にもある。このうち由良氏によって石材が供給され得るのは、由良氏が上野へ進出してきた上杉氏に帰属している永禄3(1560)年から同9年(1563)の期間、越相同盟が成立している永禄12年(1569)から元亀2年(1571)の期間、沼田領裁定によって沼田城が北条氏に渡っている天正17年(1589)から天正18年(1590)の期間と考えられる（註3）。「由良」墨書石材は、このいずれかの時期に沼田城において真田氏以外による普請が行われたことを示唆するものとして注目される。



第118図 沼田市下久屋町の段丘崖と関越自動車道片品川橋 南東から



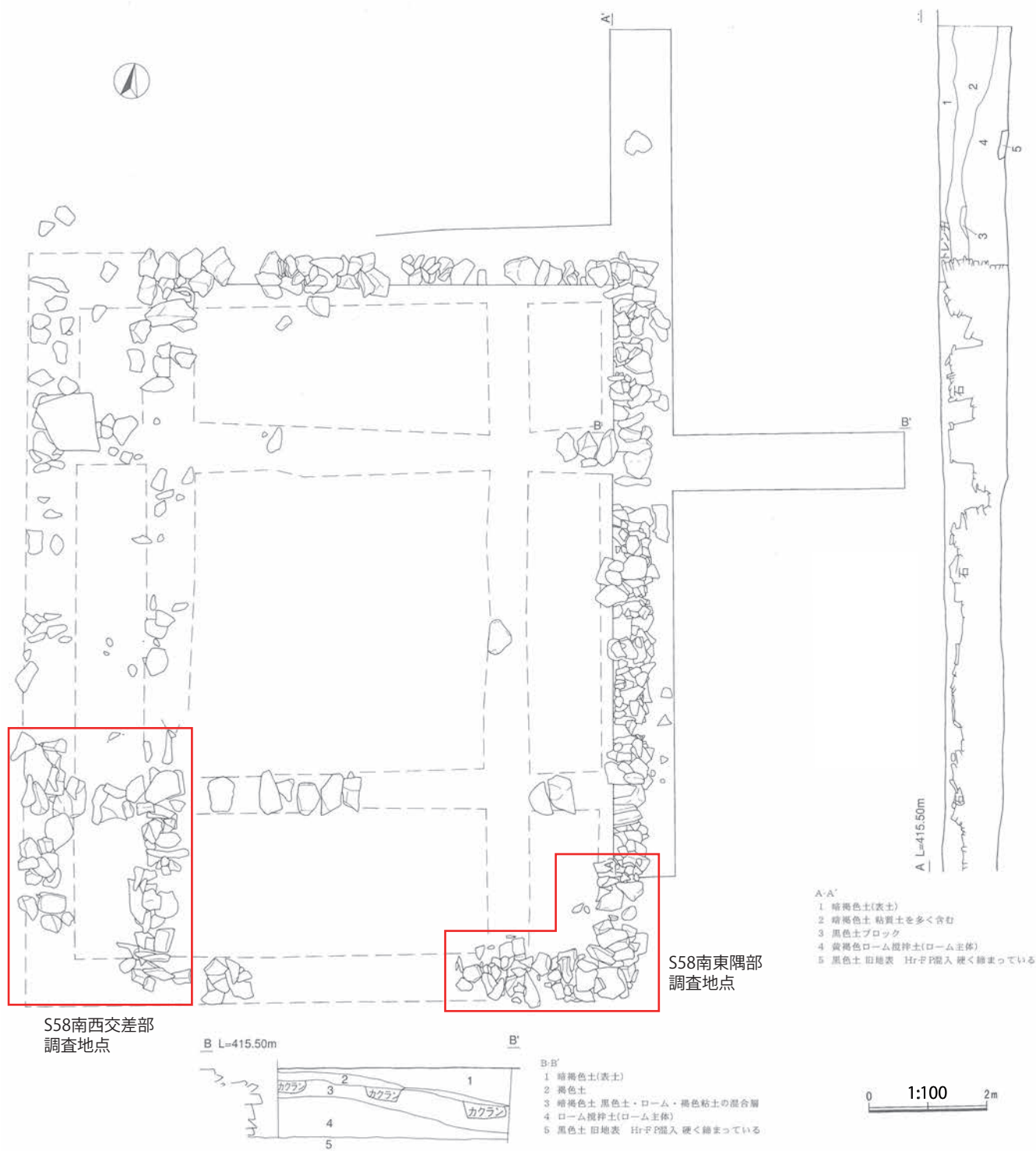
第119図 沼田市下久屋町の観音坂と安山岩露頭 東から



第120図 安山岩露頭 南から



第121図 散布する安山岩 東から



第122図 西櫓台整地土中石積平面図 (平成9年度調査) 1:100 (『沼田城跡』2001から加筆して転載)